

# 翻刻 森鷗外自筆『一葉日記抄 上』

## 須田喜代次

伊藤 裕子 井原 あや  
岩崎 明香 遠藤 亜沙子  
小川 友希子 児玉 朝子  
崎間 志津子 中村 喜代美  
中谷 由郁 矢田 麻美

## はじめに

本学所蔵の森鷗外自筆『一葉日記抄 上』を翻刻紹介する。  
本書は鷗外次女、故小堀杏奴旧蔵書で、本文・題簽共鷗外自身の手になる樋口一葉日記の抄録写本である。保護表紙題簽には「一葉日記 上」、本文共紙表紙には「一葉日記抄 上」（内題は単に「一葉日記抄」とあるところから少なくとも「下」が、あるいは「中」・「下」があることが推定されるが、現在のところ本書以外にそうしたものは見出されていない。

まず本書の書誌的事項を以下にまとめておく。

森鷗外自筆『一葉日記抄』（大妻女子大学蔵）書誌

書型 半紙本（縦二十四・四糎×横十六・七糎）

装丁 袋綴の四心綴りで、薄様雁皮紙による後補カバー。

巻冊数 「上」のみの一冊。

表紙 薄朽葉色無地の保護表紙の次に本文共紙原表紙。  
書名 外題 保護表紙 左肩貼付の子持ち梓書題簽（梓は印刷。縦十五・七糎×横二・六糎）に『一葉日記 上』。

本文共紙表紙 中央上方に「一葉日記抄 上」と打付け書。

内題 「一葉日記抄」。

構成 本文共紙前表紙・本文・本文共紙後表紙。

本文 全五十九丁。半丁六〇八行で、主として七行。丁付ナシ。

蔵書印 ナシ。ただし保護後表紙見返し左上隅に、「小堀杏奴旧蔵」と鉛筆（？）書。

備考 本文についての所見は次の通り（具体的箇所は本文実丁数とその表・裏で記す）。

(1) 墨書による訂正・書込み箇所 三十三箇所（「2」表三箇所、「6」裏一箇所、「8」裏一箇所、「10」裏一箇所、「12」表一箇所、「12」裏一箇所、「14」表二箇所、「17」裏

- 一箇所、「19」裏一箇所、「20」表二箇所、「24」裏二箇所、「26」表一箇所、「30」裏一箇所、「31」裏一箇所、「33」表一箇所、「35」裏一箇所、「38」裏一箇所、「41」裏一箇所、「44」表二箇所、「44」裏一箇所、「45」表一箇所、「49」裏一箇所、「52」裏一箇所、「53」表一箇所、「54」表二箇所、「54」裏一箇所。
- (2) 朱筆による校訂箇所 一箇所（「1」表）。
- (3) 切取り・張込み箇所 四箇所（「7」裏、「10」裏、「19」表、「24」裏）。
- (4) 袋綴の左肩上部墨筆書入れ箇所。  
「1」表 「1891」「IV・」また目印に、当該箇所の袋綴折り目上部を墨塗り。
- 「4」表 「V・」。  
「5」表 「VI・」。  
「8」表 「VII・」。  
「11」表 「K・」。  
「15」表 「X・」。  
「18」表 「XI・」。  
「20」表 「1892」「I・」。また目印に、当該箇所の袋綴折り目上部を墨塗り。
- 「23」表 「II・」。  
「27」表 「III・」。  
「30」表 「IV・」。  
「31」表 「V・」。  
「33」表 「VI・」。  
「36」表 「VII・」。  
「38」表 「VIII・」。  
「40」表 「K・」。  
「43」表 「X・」。

- 「45」表 「XI・」。  
「46」表 「XII・」。  
「48」表 「1893」「I・」。また目印に、当該箇所の袋綴折り目上部を墨塗り。
- 「51」表 「II・」。  
「54」表 「III・」。  
「57」表 「IV・」。

\*

\*

左掲翻刻本文に明らかなように、内容的には、本書は明治二十四年四月十一日の「若葉かげ」の記事に始まり、明治二十六年四月三十日の「よもぎふにつ記」（鷗外はこの日記題名を本書に記してはいないが）記事までの抄録から成っているものである。

ところで、鷗外はいつ本抄録写本を作成したのだろうか。本書には識語の類は一切なく、したがって本書からその手がかりをつかむことはできない。ただし鷗外と一葉日記の関わりということでいえば、夙に和田芳恵『一葉の日記』（筑摩書房、昭31・6、以下同書からの引用は福武文庫版による）の指摘が広く知られている。同書により簡単に鷗外の一葉日記への関わりを復習しておこう。

明治三十六年頃、姉一葉の日記の公刊を思い立った妹邦子は、馬場孤蝶に相談、孤蝶を仲介役として日記は斎藤緑雨に渡される。そして、

とにかく、斎藤緑雨は、邦子からあずかってきた日記を読んだ。そして幸田露伴と森鷗外に相談した。森鷗外は、差しつかえのある部分は削って、すぐに出版するようにとの意見であったのだという。しかしこの時の鷗外の意見を裏打ちする資料は鷗外側にはない。おそらくこの時点では鷗外の手日記現物は渡っていない。鷗外が一葉日記を手にするのは、明治四十一年、一葉十三回忌の時だったはずである。

前掲和田著書に収録されている、現『鷗外全集』未収録の、樋口家



に残るといふ明治四十一年九月二十二日付、幸田露伴宛鷗外書簡は、次の如くだ。

先日ハめつらしく帰途外ニ立より失礼仕候今日また千葉県下へ出張ニ付一寸御返事申上候

一、一葉の日記ハ出版するかよきかせぬがよきかと申せはせぬがよしと存候

二、出すとならば十分の手入を要し候ある部分をあのみ出すは一葉を傷くること甚だしと存じ候

三、類書ハマリヤ、バシユキルチエフ日記位のものか此書ハ小生未読候

猶其内御目にかゝり御話可申上候

この手紙が『鷗外日記』同年九月一日の「幸田成行来て一葉日記の事を托す。幸田は明日京都にゆくと云ふ」という記述の延長線上に書かれたものであることは間違いない。そして鷗外は一葉十三回忌の命日（十一月二十三日）も近づいた十一月十九日に「一葉日記に緒乱憂深の四字を題」（『日記』）しているのである。すなわち、この二ヶ月余の間に、鷗外は一葉日記を読破しているはずなのだ。

とするならば、前記露伴宛書簡において「出すとならば十分の手入を要し候ある部分をあのみ出すは一葉を傷くること甚しと存じ候」と書いていた鷗外が、その試みとして自らこの時期に一葉日記抄録写本の作成をした可能性が高いと考えられるのではないだろうか。そもそも明治四十五年五月、馬場孤蝶の尽力により日記全文を収録した『一葉全集 前編』（博文館）が刊行された後ではこのような抄録を作る意味は全くない。

さらに抄録された中身を見ていくと、（7ウ）の明治二十四年六月二十三日の記事（「若葉かげ」）に引き続いて、鷗外は現『樋口一葉全集』（筑摩書房）では「雑記5」として日記とは別に「筆すさひ 一」として収録されている部分から抄録している。また、（9ウ）において「わか草」からの抄録を明治二十四年八月十日の記事で終え、（10ウ）

の空白頁を挟んで（10ウ）からは、やはり同じく「筆すさひ 一」収録記事からの抄録を、それも「しのぶ草」とわざわざ題して抄録しているのである。これは「筆すさひ 一」冒頭「日々にみる所聞ところ思ことさま／＼にこそあれ 行雲のこと流るゝ水のこと過ぎはてなん年月のゝち帰りにてむかしをしのぶくさはへにもと筆の行まゝ心の趣くまゝ……」（『樋口一葉全集 第三巻（下）筑摩書房、傍線須田』）という一節から鷗外が勝手に名付けてしまったものであるに違いない。（しかしそれも他ならぬ「しのぶ草」と題された日記が後に出てくることを彼が承知していたからこそできた「勇み足」だったと思われる。）

以上のことから分かるのは、鷗外が読んだ日記の形態が、「明治三十六年頃、邦子が一葉の日記公刊を思い立ち、草稿を整理した際、数冊の雑記・随筆を「日記」の中に加えた」（野口碩「樋口一葉全集」『筆すさひ 一』補注）、その形であったということだ。（7ウ）、（10ウ）に残る「切取り・張込み箇所」は、あるいはそのことと関係があるのかもしれない。

そしてそれは孤蝶が博文館版『一葉全集 前編』で構成した日記稿本形態に極めて近いものの、微妙に違っていた可能性がある（博文館版『一葉全集 前編』日記本文は「わか草」と「蓬生日記」の間に「筆すさひ」が一括挿入された形になっている）。この意味からも、博文館版全集刊行前の明治四十一年秋に抄録写本作成の時期を想定することが許されるのではあるまいか。

とすればそれは、鷗外にとっては後に『豊熟の時代』と評されることになる時期のまさに前夜に当たる時期ということになる。一葉日記を熱心に書写する鷗外の行為と、彼の文学的な営みとの関連も注目しておいていいことなのではないだろうか。

\*

\*

なお、本翻刻は、平成十三年度および同十四年度大妻女子大学大学院「国文学特別研究Ⅲ」（須田担当）の授業参加者が順次分担担当し、授業中に全員で検討したものを基に作成したものである。

また、本書の書誌的事項の記載に関しては、本学教授石川了氏より多大のご教示を賜った。記して謝意を表します。

#### 凡例

- 一、漢字は原則として原文の表記に従ったが、異体字・略字体は適宜現在通行の字体に改めた。
- 一、句読点・濁点は原文の通りとした。
- 一、書写した鵜外の誤写と思われるものには「※」マークを付し、『樋口一葉全集』（筑摩書房）、並びに『翻刻 樋口一葉日記』（岩波書店）所収の「一葉日記」原文と照らし合わせて、正しいと思われる文字を各日付の後に注記した。
- 一、丁移りは、その末尾に当たるところに、（一オ）（一ウ）の如くに記した。
- 一、（12オ）にあるような、本文脇に「不明」とする注記は書写した鵜外自身の手書き入れであるので、そのまま生かすようにした。
- 一、原文には左肩に「1891」「N.」というように、西暦を示す算用数字と何月かを示すアラビア数字が記載されている丁がある。その丁には、「※」マークを付して各日付の後に注記した。

#### 一葉日記抄

若葉かげ

明治二十四年四月十一日。吉田かとり子ぬしの澄田川の花見の宴に招かる。妹と共々ゆく。山下といふ所より、昔住みけん宿のわたり過ぐ。八とせばかりの程に、下寺といひつる奥津城とて、鉄の道引つらねたり。はらから難波津習（1オ）ふころ師のもとかり行くとして常に行きかよひしところなり。長命寺にて桜餅もとめて妹に持たせかへしつ。母君にまゐらせんとてなり。かとり子ぬしの家は三囲の社のそかひに高く聳えたる三階なり。みの子つや子の君など早く来て居給ひぬ。師の君龍子の君静子の君など来た給ふ。龍子静子の君は大学のきそ（1ウ）ひ舟見んとて行き給ふ。伊東の夏子ぬしみの子ぬしなど歌よみ給ふ。久子の君琴引き給ふ。あるしの君の妹の君なり。

#### 一葉日記抄 上

##### 一葉日記抄

若葉かげ

明治二十四年四月十一日。吉田かとり子ぬしの澄田川の花見の宴に招かる。妹と共にゆく。山下といふ所より、昔住みけん宿のわたり過ぐ。八とせばかりの程に、下寺といひつる奥津城とて、鉄の道引つらねたり。はらから難波津習（1オ）ふころ師のもとかり行くとして常に行きかよひしところなり。長命寺にて桜餅もとめて妹に持たせかへしつ。母君にまゐらせんとてなり。かとり子ぬしの家は三囲の社のそかひに高く聳えたる三階なり。みの子つや子の君など早く来て居給ひぬ。師の君龍子の君静子の君など来た給ふ。龍子静子の君は大学のきそ（1ウ）ひ舟見んとて行き給ふ。伊東の夏子ぬしみの子ぬしなど歌よみ給ふ。久子の君琴引き給ふ。あるしの君の妹の君なり。

\*左肩に「1891」「N.」の記載あり。

十五日 雨。野の宮きく子ぬしの紹介し給ひつる半井大人から行く。海近き芝のわたり南佐久間町といふところなり。かねて一たび鶴田といふ人に物すとてその家にゆきしことあり。（2オ）妹君出ます。主人の君は東京朝日新聞の記者なり。小説雑報をあづかり給へり。主人やかくて帰り給ひぬ。君が小説を書き給ふこと野の宮ぬしより承りぬ。師といはれん能はあらねど、談合せんとならば、遠慮なく来給へとのたまふ。小説の草稿一回分丈さしおきて、君が作れる小説四五冊借りて出でぬ。（2ウ）

二十一日 夜野の宮君吉田君来給ふ。野の宮君の園遊会の景物の事相談せんとてなり。

二十二日 半井桃水ぬしに小説の続稿を参せんとて持行きぬ。小宮山即真ぬしに紹介せんと給ふ。



二十四日 全篇を半井ぬしに郵便もておく(3オ)りぬ。

二十五日 小石川の稽古に物す。

二十六日 神田表神保町俵といふ下宿に物す。きのふ半井ぬし手紙もて招き給へりしなり。隔なき友垣を結ばんとねんころに告げ給ふ。

(3ウ)

五月二日 小石川に物す。師の君等十三人と植物園にゆきぬ。

八日 桃水君を訪ふ。夕に小宮山ぬしも来給ふ。三十四歳なれば、桃水ぬしに二つの兄にておはす。

十二日 ぬし麴町區平河町に屋移しつとしらせ給ふ。(4オ\*)

\*左肩に「V・」の記載あり。

十五日 半井ぬしの新居に物す。

二十七日 大坂の雑誌に出すべき小説持ちて半井ぬしかりゆく。

三十日 小石川に物す。残の原稿を半井ぬしにおくる。

三十一日 みの子ぬし三番町の萬源にて発會し給ふに赴く。小石川の師の君来給ふ。(4ウ)

六月一日 小石川の師の君かり物す。

三日 半井ぬしへ物す。

六日 小石川に物す。くら子ぬしを家に伴ひかへる。

九日 礪河の月次會なり。おのれは残りて、名古屋の禮子ぬしにおくる文ものす。

十日 みの子ぬしと図書館に物す。○ひと日師(5オ\*)の君のもとに小集ありし時、坐中の男女の年くらへせんといふ人あり。文雅堂のあるし伊豆田数をとる。鈴木重嶺大人七十八、梅村のりをぬし七十、加藤安彦うし七十二、亘利恒久君七十、木村正義君四十九、水野忠敬子四十、小出繁ぬし六十なりき。女は師の君四十八、伊東延子ぬし五十九、みの子ぬし三十五、(5ウ)とよ子ぬし同上、かとり子ぬし四十七、小川信子ぬし四十五、高田ふく子ぬし二十三、前嶋きく子ぬし二十、田辺静子ぬし同上、伊東夏子ぬし同上、小笠原つや子ぬし十六、廣子ぬし十九、中牟田垣子ぬし十三、おのれ二十。数ふれば女のかた

二十の負になりぬ。

\*左肩に「VI・」の記載あり。

※1「亘利」は「江刺」の誤写と思われる。

※2「ふく子」は「不二子」の誤写と思われる。

※3「垣子」は「恒子」の誤写と思われる。

十三日 小石川に物す。みの子君より乙骨まき子(6オ)ぬしの文を受く。大嶋みとり君入門す。

十四日 國子関場君に書籍少し借り来ぬ。学海居士の十津川物語もあり。

十五日 秀太郎来ぬ。

十六日 三田の兄君より文来ぬ秀太郎来ぬ。

十七日 奥田の嬢来ぬ。共に出て路より別れ、半井ぬしがり物す。

(6ウ)

二十日 小石川に物す。川越中嶋ぬしの嫁の君に逢ひまゐらす。

二十二日 師の君と、明日帰京し給ふべき中村君の家見にゆく。國子の誕生日なり。

二十三日 灸治にゆき、図書館に立寄る。○師の背の君林忠左衛門君は夕げのをり三升の酒を物し給ひぬ。ある時山岡鉄太郎ぬしと(7オ)共に一斗の酒ものし給ひて後、高あしたはきてん箱根山こえ給ひきといふ。○大隈重信ぬしは親しききはの人にも消息し給ふことほとくなくしとぞ。

わか草(7ウ)

七月十七日 みの子ぬし月次會なり。谷中なる真下まき子の墓に詣づ。

二十一日 稲葉君来て落魄の事をなげく。地震。

二十二日 新聞に下田歌子君加納君に興入すとあり。

二十三日 上野伯父君、野々宮君、吉田君など来ます。(8オ\*)

\*左肩に「VII・」の記載あり。

二十四日 西村君、菊池お政君来ます。

二十五日 小石川に物す。

二十九日 母君神田へゆきます。雷雨。

三十日 三枝信君来ます。

八月一日 小石川に物す。前嶋君に小説を借る。山下次郎君来ぬ。直一病ありとぞ。

二日 母君山下の見まひにゆき給ふ。稲葉君、(8ウ) 山下信君来ます。

三日 稲葉君、姉君来ます。母君岩佐へゆき給ふ。母君酒旨しとの給ふ。

四日 稲葉君正朔君を伴ひ来てあづかりくれとの給ふ。一日はとてあづかる。

五日 正朔君を今一日あつかりくれよとなり。江崎牧子君の状来ぬ。國子と安達君に暑中(9オ) 見舞にゆく。おのれが腦を患ふる癖あるを聞きつとて、勉学を戒め給ふ。

八日 図書館にゆく。忍ばずの池の蓮盛なり。

九日 江崎牧子君、甲府伊庭氏並に北川秀子君に書を出す。

十日 植木屋建仁寺垣結ひに来ぬ。(9ウ)

〔(10オ) は空白。〕

しのぶ草

九月七日 母君浅草なる三枝信三ぬしかりゆきて三十金借り給ふ。

八日 母君小柳町もち月の赤子の病みにゆきて、(10ウ) きのふ借りたる金の中を貸し給ふ。○花圃女史田辺龍子ぬしは太一ぬしの一人娘におはす。ことし二十四歳なるべし。二十一歳の頃藪の鶯を物し給ふ。その後都の花に八重桜といふをも出し給ひぬ。○天野龍子ぬしは文学士為之君の室にして、前橋孝義君の妹なり。御子二方おはします。文子の君(11オ)\*武君これなり。二十六七歳にや。○片山照子ぬしは東熊ぬしの室にて、田辺朔郎ぬしの姉君なり。龍子ぬしにはいとこなり。三十歳あまりなるべし。○伊東夏子ぬしことし二十になり給へり。○嶋田政子ぬし、乙骨牧子ぬし、島尾廣子ぬし、高田ふく子ぬし

し、前嶋きく子ぬし、橋本花子ぬし、田辺静子ぬし、清水(11ウ) 田鶴子ぬし、水野詮子ぬし、中村とし子ぬし、長齡子ぬし、中牟田常子ぬし、伊澤夏子ぬしなど親しき友なり。○小出大人はいと人に憎まるゝ人なりけり。師の君茂子ぬしなどをも呼びつけに呼給ふ。

\*左肩に「K・」の記載あり。

※「ふく子」は「不二子」の誤写と思われる。

蓬生日記

九月十五日 晴。灸治にゆく。それより図書館(12オ)に入る。五雑俎を借りて見き。帰路にみの子君のもとにゆく。おとつ日より箱根鎌倉を旅行してきのふ帰らせ給ひぬとぞ。

十六日 洗濯あまたす。師の君の衣を縫ふ。山下直一君来給ふ。

十七日 師の君がりゆく。みの子ぬしの月次會なり。高點はおのれのなり。各評の天小川信子ぬし、(12ウ) 地中村禮子ぬし、人伊東延子ぬし。宵に久保木の姉君まゐらる。

十九日 稽古日なり。

二十一日 母君築地へ寺参にゆき給ふ。望月より使来ぬ。

二十二日 中嶋くら子ぬし書冊を返さる。師の君の衣ぬひをえつ。

(13オ)

二十三日 師の君に衣をまゐらす。稲葉鑛の君来給ふ。野の宮君も来らる。妹と吉田へ書返しにゆく。

二十四日 みの子君の屋移し給ふべき日なり。お鑛君及本所の千村禮三君参らる。甲州の廣瀬来ぬ。

二十五日 小石川月次會なり。甲乙伊東夏ぬし(13ウ)とおのれとなり。

二十六日 千村禮三ぬし正朔君と共に来らる。図書館へとて出でぬ。途にて今野はるの商品陳列館に出勤せんとて往くに逢ひ伴ひて行きぬ。陳列館は未だ開かざりき。真下の槇子としか墓に詣づ。さて図書館に入りて、日本紀、花月草紙、月次消息を閲す。國子関場にて半井うし(14オ)の品行あしきことなど聞きてかへりぬ。関場より吉野拾



遺、日本外史などかりて来ぬ。稲葉の妻君来ます。

二十七日 久保木の姉君来らる。廣瀬来ぬ。

二十八日 國子吉田君に書物返さんとして行く。藤田より目さまし時計を買ふ。

二十九日 三枝に借りたる金の内を藤田屋に貸(14ウ)す。吉田君三人づれにて来らる。上野の伯父さみ来らる。

三十日 廣瀬来ぬ。是日帰國すといふ。大風なり。久保木姉君見舞に来給ふ。

十月一日 師の君に風の見舞にゆく。

三日 小石川に物す。

四日 國子と摩利支天にまゐる。(15オ\*)

\*左肩に「X・」の記載あり。

五日 西村君来らる。瀧野君より栗をおくらる。

六日 姉君来給ふ。

八日 夜母君と薬師にまゐる。姉君に逢ひぬ。後立寄り給ふ。

九日 小石川に物す。かとり子君も来ます。高点小出君とおのれなりき。奥田の老人来ぬ。(15ウ)

十日 母湯嶋天神の祭にゆきます。おのれも國子とまゐりぬ。兄君明日日限となれる借財ありと申来させ給ふ。母君ある丈の金持ちて車にてゆき給ふ。

十二日 母君本願寺にまゐり給ふ。稲葉の妻君正朔君と共に来らる。姉君来らる。秀太郎来ぬ。(16オ)

十七日 稽古日なり。松井節哉君入門せらる。岡田より仕立物頼みに来ぬ。夜母君、妹と月見に出づ。

十八日 山下君来らる。菊子ぬし来て半井ぬしの我上を案じ居給へりとのたまふ。

二十日 図書館にゆく。

二十二日 半井君の書状に孝子の君嫁入の事(16ウ)あり。

二十三日 もち月来ぬ。

二十四日 小石川に物す。師の君は近衛家令夫人前田氏うせ給ひしとふらひに行き給ふ。前嶋むつ子ぬし入門せらる。

二十五日 半井ぬしを訪ふ。帰路に師の君がり立寄りしに佐々木君に診察受けとして(17オ)出ますところなりき。

二十六日 國子関場君にゆく。半井君負債の事を聞き来ぬ。又尾崎紅葉が不品行の事いと多く聞きつ。

二十八日 地震ふる。國子と急ぎの裁縫などす。

三十日 半井ぬしを訪ふ。一丁計隔たりた(17ウ)る隠家にとまなはれぬ。世の醜聞は詐なり。打絶えさせ給ふを小宮山などあやしめり。

前の如くたづね給へ云々とのたまふ。小説など借りてかへる。

三十一日 稽古日なり。小紋ちりめんの衣を給ひぬ。

十一月一日 鳥尾君がりゆく。(18オ\*)

\*左肩に「XI・」の記載あり。

三日 山下君来ます。

四日 是日より小説一日一回と定め、必ず書くこととす。久保木姉上来ます。

六日 奥田老人来ぬ。

七日 小石川に物す。

八日 東鑑、太平記、今昔物語を図書館にて見る。帰路に彌生町の坂にて、若き書生の(18ウ)菊の鉢を藁にて結びたるを持たるに、藁き

れて行きなやめるを見、絹ひもを興へんとせしに、大学生一人来かりて、あやしげに見居たり。彼書生と西片町にて別れぬ。

九日 小石川に物す。田辺有榮氏来ぬ。

十日 稲葉君正朔君来らる。(19オ)

明治二十五年一月一日 山下直一君、久保木秀太郎君、藤井房蔵、西村訓之助、志川とくの三君来ます。岩佐君は門より帰らる。小宮山の年始状来ぬ。喜多川君の<sup>不明</sup>も来ぬ。

二日 小宮山来ぬ。古田恒之助、師の家の旧婢玉など年始客なり。(19ウ)

※「古田」は「土田」の誤写と思われる。

三日 綾部喜亮君、上野伯父君、三枝新君来ます。  
四日 藤田君、菊池君来ます。野尻君、渋谷君、(越後国蒲原郡三條町) いづれも年始状あり。渋谷君は久しく打絶えての事なれば、住所をも始めて知りぬ。(20才)

\*左肩に「I・」の記載あり。

五日 佐藤梅吉君来ます。田部井も来ぬ。  
七日 稲葉君親子、奥田の外客なし。

八日 綾部喜亮君久保木と共に来ます。師の君がりゆく。新小川町のみの子君を訪ふ。半井ぬしを平河町に訪ふに旅行中なりといふ。(麴町区平河町二丁目十五番地)(20才) かくれ家を覗へば、人なくして火鉢は火あり。菓子箱をおきて帰る。是日宮塚伯母君、姉君、森昭始君、西村伯母君来ます。

九日 小石川稽古始。

十日 安達君に年始にゆく。小宮山、おげん(21才)の二人来ぬ。

十一日 半井ぬしは隠家にありと聞く。

十二日 雪。

十三日 図書館にゆく。太平記、大和物語を見る。

十四日 母君神田にゆき給ふ。

十六日 小石川に物す。堤よし子ぬし(21才)入門し給ふ。

十七日 母君小林君、三枝君へ年始にゆき給ふ。山下直一君来ぬ。

十八日 母君望月にゆき給ふ。廣瀬ふん来ぬ。

十九日 母君下谷へゆき給ふ。

二十日 母君ふんの事にて常総館にゆ(22才)き給ふ。濱田妻子来ぬ。二十三日 小石川稽古日なり。風邪なれどゆく。小笠原政徳君おはしき。

三十日 小石川に物す。

二月四日 翼。半井ぬしを訪ふ。一昨夜新雑誌発行の相談會ありき。それに小説を出せとのたふ。未完を草稿を出し(22才)てまゐらす。

一宿せよ、おのれ在りてあしくはおのれ小田へゆきて寐んとの給ふ。辞みてかへる。途中感ずることありて、雪の日といふ一篇編まばやおもふ。

六日 小石川に物す。(23才)\*

\*左肩に「II・」の記載あり。

七日 山下君、西村君、萩野君来ます。石井君も来ます。

九日 奥田老人病めりと聞きて、母君ゆき給ふ。萩野君、姉君、秀太郎など来ぬ。(23才)

「(24才)は空白」

十日 はは君奥田にゆきたまひぬ。師の君風邪と聞きてゆく。

十一日 師の君を見舞ふ。

十二日 父君の命日なり。

十三日 稽古日なるをことわりて小説を書く。

十四日 小説全部出来ぬ。半井君のもとに報じ遣す。(24才)

十五日 半井君のもとに持ちゆく。

十六日 母君森照次君がり金借りにゆき給ふ。芝兄君のもとに金を持ちゆく。

十七日 萩野君を旅館に訪ひ、それより図書館にゆく。

十八日 母君と林町なる森君を訪ふ。八圓借りて証書をまゐらす。此

家の小君の師は竹(25才)内桂舟なりと聞く。稲葉君来給ふ。新作にかか

十九日 雪。母新平のもとへゆき給ふ。

二十日 師の君がりゆく。田町にて田中君の橋道守君の発會にゆき給ふに逢ふ。

二十一日 小石川に物す。みの子君居給ふ。文雅堂も来ぬ。黒川君の甲はかとり子ぬし、小出君の(25才)は佐藤君、三田君の甲と黒川君の乙とはおのれのなりき。佐藤、井岡、田中の君とおのれと残りて物語す。

二十七日 小石川に物す。三田彌吉夫人入門せらる。  
不明



二十八日 図書館にゆく。田中みをの女夫に逢ふ。禪に志すとなり。  
(26オ)

※「女夫」は「女史」の誤写と思われる。

三月一日 田中君より小説の世話せんと申来ぬ。棚なし小舟に着手す。

二日 新小川町にゆく。田中君各評の締切となりしところにゆきぬ。

五日 小石川に物す。みの子の世話にて小説を或方におくることとなる。みなし子に着手す。

七日 半井君を訪ふ。むさしのは熱心の人多く(26ウ)柳塙亭寅彦は原稿に金添へて出さんと云ひ、年方は画を寄附せんといふなどのたまふ。

八日 関場君がりゆく。悦子君實家妹十歳許なるを中嶋師のもとに入門せしめたと頼み聞えける。

九日 小石川月次會に物す。信綱君の甲はおのれなり。(27オ\*)

\*左肩に「Ⅲ」の記載あり。

十二日 師の君の催しにて、向嶋に梅見にゆく。

十三日 稲葉君小石川柳町に移り給ふ。

十四日 衣を持ちて師の君がりゆく。

十五日 母君森君がりゆく給ふ。渡會といふ人稲葉君をたづねて本所より来ぬ。稲葉君の食言家なることを語る。村松老人稲葉君のことを告げに来ぬ。お鏡どの来て辨解(27ウ)し給ふ。

十六日 國子と本妙寺へ種痘にゆく。秀太郎を伴ひゆく。

十七日 みの子君發會なり。

十八日 半井ぬし始て来ます。本郷西片町に移り給ひしことを告げ給ふ。

十九日 小石川に物す。首藤陸三氏の女小間使と(28オ)なりて今日よりここにあり。みの子ぬしとおのれ高点なり。

二十日 山下直一君来ます。伊東ぬしを訪ふ。

二十一日 半井ぬしを訪ふ。庭より出入すること許さる。野々宮の

すゝめにて會堂に往くべきことを話しゝに、風習惡しとてとどめ(28ウ)給ふ。

二十二日 みの子ぬしと図書館にゆく。

二十三日 半井ぬしを訪ふ。むさしのは題号を書す。むさしのに不足のところありとて文を求めらる。春雨の長雨を物す。

二十四日 長歌の稿を持ちて師の君を訪ひ、見せまゐらす。師の君衣を賜ひ、常陸帯(29オ)といふ自筆の日記を見せ給ふ。人には秘め給ふものぞとなり。添刪給はりし長歌持ちて半井ぬしの許にゆく。森君の約せられし金出来ぬため、半井ぬしに打出でしに、直ちにうけかひ給ひぬ。

二十五日 おのれが誕生日なり。西村君来ます。(29ウ)

二十六日 稽古日なり。芝の兄君来ます。

二十七日 半井ぬしに招かれてゆけば、おのれの小説を改進新聞に出さんとなり。藤田に金一円借りて、二円兄君にまゐらす。

二十九日 水野各評を持ちて師の君がり往く。

四月五日 水野君の會日なり。せん子ぬしの(30オ\*)琴あり。

\*左肩に「Ⅳ」の記載あり。

十八日 半井ぬしを訪ふ。心よからぬさまなり。何事にかと氣づかふ。

十九日 鍛冶町石川君及菊池君奥方来ます。

二十日 図書館にゆく。随筆類を見る。

二十一日 大人がりゆく。畑嶋君居給ふ。

二十三日 小石川にゆく。日就社鈴木光次郎氏(30ウ)師の履歷を聞かんとて来居たり

二十五日 國子齒痛の願掛に、谷中坂町妙清寺へ、姉君と共にゆく。

三十日 小石川に物す。帰路に大人がりゆく。痔疾を秘し居給ひしを、一昨日切斷しつとなり。

五月一日 伊豫紋の口取りを半井ぬしにまゐらす。(31オ\*)

\*左肩に「Ⅴ」の記載あり。

三日 西隣の家に移ることと定む。

四日 半井ぬしを訪ふ。

五日 屋移す。

七日 稽古日なれど往かず。著作す。

九日 小説成る。蒸菓子を買ひて半井ぬしがりゆく。會日なるに、お

くれて小石川にゆく。師の君立腹し給ふ。(31ウ)

十三日 師の君のもとに往く。

十四日 稽古日なり。

十七日 田中ぬし會日なり。

十九日 半井ぬしを訪ふ。

二十日 又訪ふ。

二十一日 小石川に物す。野々宮君来ぬ。教會の帰りなりとて一泊を

乞はる。(32オ)

二十二日 野々宮君半井ぬしの性行を物語りす。半井君を訪ふ。

二十八日 小石川に物す。半井君を訪ふ。○この頃半井ぬしとの事を

あしざまにいふものありて、師の君に諫められぬ。身の清白は人に知

られぬぞ是非なき。されど今の交も迷に入る山口にもやあらん。(32

ウ)

#### しのぶ草

六月三日 午前十一時師の老君みまかり給ひぬ。一日より病重りぬれ

ば、介抱しまゐらせつ。醫者は佐々木東洋ぬしなれど、急なるときは

程近く住める矢嶋といふを招きぬ。師の兄君、其娘など枕邊につどひ

給ひぬ。

四日 小出ぬし櫻雲臺にて、何がしの追薦(33オ\*)會を催し給ふ。師

の君の代としておのれ行く。心ここにあらねば、歌もえよまず。

\*左肩に「Ⅵ・」の記載あり。

五日 柩に納めぬ。

六日 午後野邊送す。こし脇の役をつとむ。

七日 半井うしを訪ふ。従姉妹の君居給ふ。うしのたまはく。おん身

の小説は繪入の新(33ウ)聞に似付かはしからず。紅葉に頼みて讀賣  
などに出すこととせんはいかに。此事をば畑嶋に物語しつ。紅葉に逢  
はせまつる日もあらんかとのたまふ。

十二日 祭の式あり。伊東夏子ぬし、半井ぬしとの交を断てと勧め給  
ふ。

十三日 長齡子ぬしのもとに順會あり。(34オ)

十四日 師の君に半井ぬしとの交を断つかたよかるべきかと問ひし

に、夫婦の約束せし上は是非なし、さらずば断てとのたまふ。田中ぬ

しなどより世の噂をば聞き給ひしやうなり。

十五日 半井ぬしを訪ふ。伯母ぎみ居給ふ。師の君の宣給ひしことを

語る。(34ウ)

二十二日 半井ぬしのもとへ返すべき書物持ちてゆく。人の噂うるさ

ければ、暫し中絶えんかたよろしからんといふ。國子迎へに来ぬ。

二十四日 畑嶋君に見すべき紅葉へ紹介をこたわる文を半井ぬしに遣

る。(35オ)

二十七日 亡兄の命日なり。西村君来らる。

七月一日 師の君田中君と鎌倉にゆき給ふ。留守は西村鶴どのとおの

れとなり。池田屋の妻家事をまかなふ。

二日 師の君の状来ぬ。宿は長谷の三橋なり。(35ウ)

四日 師の君の状来ぬ。八幡前三橋支店に遷り給ひぬ。

五日 師の君婦ります。

九日 鍋嶋邸に行幸あり。師の君参邸し給ふ。

十日 行啓あり。師の君参り給はんとす。西村禮どの参らる。伊東君

に金子を借(36オ\*)りにゆく。

\*左肩に「Ⅶ・」の記載あり。

十一日 亡父祥忌日なり。菊地の内君、上野の伯父君、久保木の姉君

来ます。

十二日 國子と築地の御墓に詣る。伊東しき子刀自を訪ふ。中元の礼

に半井ぬしを訪ふ。何方へか転居せんとすと人々いふ。物語せで歸



る。田辺君を訪ふ。(36ウ)

十四日 師の君を訪ふ。

十六日 小石川に物す。

二十一日 図書館にゆく。陶器の事を調べたためなり。

二十二日 同上。

二十三日 稽古日なり。表町西村君を訪ふ。(37オ)

二十六日 吉川君の内子参らる。

二十七日 図書館にゆく。

三十日 安達に書画受取りにゆく。師の君を訪ふ。

三十一日 野々宮君来らる。

八月一日 田中君来らる。

二日 山崎正助君来らる。(37ウ)

三日 図書館へゆく。

六日 稽古日なり。

七日 野々宮来ます。

十三日 稽古日なり。

十四日 野々宮君来ます。

十五日 母君奥田へ病氣見舞に行き給ふ。山下直一君来らる。(38オ\*)

\*左肩に「Ⅷ・」の記載あり。

十六日 田中ぬしを訪ふ。師の君の考にては我上の風説は此人より出たるにて、そは小出ぬしに與して、師の君の会を傾けたためぞとおぼすなり。田中ぬしの家の書生新聞社に關係せりや否や問へとなり。さる關係はなかりき。

十七日 田辺君を訪ふ。(38ウ)

二十日 稽古日なり。

二十一日 野々宮君来ます。歌上達す。野々宮に借りたる繪の手本を習ひ始む。國子と三崎町より九段下まで散歩し、半井君の家をよそながら見つ。

二十二日 菊池の老君来ます。則義在世ならば此家にかかる苦しきこ

とはあるま(39オ)じきを是非なき事なり。夏子は戸主なれば、嫁入は出来まじ。只身の潔白をつとめよ。風評などは自ら消ゆべしなどのたまふ。

二十三日 西村君、渋谷君来ます。

二十四日 西村君来ます。

二十七日 稽古日なり。(39ウ)

二十八日 野々宮君来ます。半井ぬし鎌倉に往き給ふと聞く。

二十九日 野々宮君来ます。

三十日 母君安達へ金借りにゆき給ふ。借さず。山下直一君来ぬ。

九月一日 母君鍛冶町にて金借りて帰り給ふ。山崎君に返すべき十圓なり。(40オ\*)

\*左肩に「Ⅸ・」の記載あり。

山崎君渋谷三郎君を我家の増にせずとすゝめ給ふ。検事月給五十円なり。昔父上増にせんとおぼして、事まとまらぬうちうせ給ひぬ。母も我もよしとおもひしに、先方より利欲がましき事いひ出でて破談となりぬ。さるを今我家衰へ果てたるに、此事言ひ出づるは奈(40ウ)何ぞや。憎き人にはあらねど諾ふべくもおぼへず。

二日 久保木の姉君家出し給ひしを水道橋の袂にて取押ふ。

四日 西村君、野々宮君来ます。上野の房藏氏来ぬ。

五日 芝の兄君来ます。(41オ)

七日 動坂小笠原家の歌会にゆく。

九日 兄君来ます。

十日 小石川に物す。加藤の妻と語る。

十五日 小説うもれ木成ぬ。田辺君のもとへ持ちゆく。

十五日 図書館にゆく。春雨物語、丈山夜譚、哲学雑誌など見る。

萩野君(41ウ)を訪ふ。

※「十五日」は「十六日」の誤写と思われる。

一七日 奇々物語、癖物語、昔々物語、雨中問答、乗合はなし杯圖書館にて見る。山下直一君来らる。

十八日 野々宮君来ぬ。

二十三日 野々宮君の状に甲陽新報に小説作りて寄せよとあり。(42オ)

二十五日 野々宮君来ぬ。

二十六日 師の君を訪ふ。

二十九日 兄君美濃へ出立給ふ。

十月一日 稽古日なり。

二日 田辺君の状に、うもれ木を都の花に出す、一葉二十五錢とあり。母君此状を持ちて三枝君がりゆき、六圓借り給ふ。(42ウ)

十一日 野々宮君来ぬ。十四日岩手縣に出立たんといふ。

十四日 安達君の病を訪ひ、停車場にゆきて野々宮君を送る。毛利すま子ぬしと相識る。

十五日 稽古日なり。榊原家令嬢入門し給ふ。(43オ\*)

\*左肩に「X・」の記載あり。

十六日 田邊君を訪ふ。

十七日 上野房藏君来らる。

十九日 西村君来ます。

二十日 甲陽新報に経机出づ。

二十一日 図書館にゆく。留守に金港堂編輯人藤本藤陰来ぬ。うもれ木原稿料十一円七十五錢もて来ぬ。猶頼み(43ウ)たき事ありといひおきぬとなり。

二十二日 猿楽町藤本にゆき對面す。明年の初刷附録を頼まる。

二十三日 三枝に六円返さんとして母君ゆき給ふ。

二十四日 金田重君を訪ふ。母君と語る。途に半井ぬしの婢に逢ひて近状を聞く。(44オ)夜眠らず。

※「金田重君を」は「田邊君を」の誤写と思われる。

二十五日 母君田部井を訪ひ給ふ。西村常女張物せんとて来ぬ。

道芝の露

十一月九日 萩のや歌會に往く。田中、鳥尾、中村などの人々先づお

はしき。龍子ぬし此二十日迄に嫁入り給ふべきよしなり。(44ウ)

十一日 龍子ぬしを訪ふ。三宅雄二郎ぬしに嫁き給ふなり。母君のゆるしあれば、三崎町の半井ぬしが立寄りぬ。都の花に小説を出すことをことわらんといふを名に立寄ることゝはなりぬ。明治女学校の師何某女学雑誌に我文を出したしといひぬとなり。畑嶋の老母みまかりて、此二三日ぬしはそこに居たまひきとなり。ぬしは葉茶屋の店を開きて(45オ)みづから賣買し給ふなりけり。裏町は人通りなければそこよりをり／＼来給へなどのたまふ。

\*左肩に「X・」の記載あり。

十二月七日 半井ぬしの文に、小説こさふく風を一巻とせんとす、歌一首題してよとなり。直に返す。

二十日 新田君来ます。兄君の使にて、彼歌を(45ウ)取りに来ましとなり。

※「新田君」は「龍田君」の誤写と思われる。

二十四日 奥田の利金を拂はゞ、三枝君に借りたる金も残らざるべし。暁月夜原稿料も来ず。年をばいかにして迎ふべき。龍子ぬしの文に、女学雑誌社より出づべき文学會といふ雑誌に小説ものすべきよし申越されぬ。

二十六日 三宅夫婦を訪ふ。志賀重四郎君(46オ\*)先におはしき。志賀君は宮崎某の窮を救はんため、金の相談に来ましゝなり。雑誌は女学雑誌社の北村透谷、星野天知子兩人の創立にて、初め葛衣と名づけしを、文学會と改めぬ。龍子君の意見なりきとぞ。おのれに小説書かせんといふは、星野君の頼なりといふ。(46ウ)

※「重四郎」は「重昇」の誤写と思われる。

\*左肩に「X・」の記載あり。

二十七日 亡兄清光院祥月の命日なり。久保木の姉君を招く。芝の兄上は来まざす。奥田老人に利金二円わたす。藤陰の状に、明日暁月夜原稿料をわたさんとなり。

二十八日 原稿料三十八枚分十一円四十錢受取る。師の許へ歳暮の礼



にゆく。中村よりとて帯あげのちりめんを賜はる。帰路に、おなじ乳(47才)房にすがりし身なればとて、稲葉のほなみ様の窮居をおとづれて金少しおくる。正朔君をさなきながら喜び給ふ。

二十九日 文学會のために筆を取る。

三十日 同上。妹あまりに心を苦むるはあしかるべしと諫む。筆をとどむ。

三十一日 三宅君にことわる。國子と買ものに出(47ウ)三崎町の新聞なる半井ぬしの店にみめよき女あり。國子妻君なるべしといふ。さらばかねて聞きつる大坂の富人の女にやとおもふ。

明治二十六年一月一日 芦澤芦太郎兵衛より賜饌を持ち来ぬ。野尻理作、穴澤小三郎、山下信<sup>註</sup>などいふ人々の年始状来ぬ。

※「信」は「信忠」の誤写と思われる。

二日 三枝、藤林、山下、安達、兄君、久保木の姉(48才\*)君など来ます。歌かるたをす。正朔君も来ぬ。

\*左肩に「1893」「I」の記載あり。

三日 田中みの子君来ます。

四日 大嶋みとり子君来ます。

八日 始て年頭に出づ。猿樂町藤本君、西小川町大嶋君、下二番町田辺君、三宅君などの家にゆき、帰路師の君がりゆく。田中君(48ウ)がりゆくべかりしに、三宅君のもとにて逢ひて、又家にあらん日來よといはれぬればやみぬ。文学界の小説ハ二十日発売の間にあふやう書けとなり。

十三日 宮塚ぬし来ます。上海にゆき給ひしは五年前なり。共に羽根つきしは、君が十七歳の頃なりき。(49才)

十四日 小石川稽古始。

十五日 上野の清次と母と、菊池の武治と母、田部井の清三と父と、柳原家の令嬢と乳母となどの客あり。

十六日 秀太郎来ぬ。西村君来ます。

二十日 西村君を頼みて飯村丈三郎ぬしにもらひし議會傍聴券を兄上

におくる。此夜迄(49ウ)に小説雪の日を書き終りぬ。

二十一日 稽古日なり。雪の日を三宅君がりおくる。師の君錦輝館にゆき給ふ。

二十二日 藤本君を訪ふ。野々宮君、吉田君来ます。

二十三日 母君小林君に金かりにゆき給ふ。菊池君の老母来ます。三枝に火事見舞(50才)にゆく。

二十五日 雪。中村禮子ぬしのもとに歌會あるべき日なり。

二十八日 稽古日なり。

二十九日 雪。芦澤来ぬ。

二月三日 母君上野に年始にゆき給ふ。

五日 梅どの母君を水天宮に伴ひゆく。日(50ウ)曜なれば芦澤来ぬ。

六日 小説に無瑕の美人を作らんとて心を砕く。

七日 夕摩利支天に詣で、萩野ぬしのもとにて新聞を借る。

八日 小説をおもふ。金港堂のあつらへに、優美なる歌人を出せといふぞ苦しき。わが知(51才\*)る歌人は俗なると猜忌なるとなり。

\*左肩に「II」の記載あり。

十日 小説の腹稿成りぬ。

十一日 小石川に物す。渡瀬某、坪内某、白根某入門す。龍子君岩本善治氏の子の葬に立たんとて去給ふ。江崎まき子ぬし女子を生み給ひぬといふ。(51ウ)

十三日 寒甚し。

十四日 母君小林君がりゆき給ふ。

十七日 地震ふる。西村君来ます。

十八日 姉君来ます。

十九日 稽古日なるを休む。

二十日 國子と安達盛直君の病を訪ふ。是日望月、芦澤来ぬ。(52才)  
二十二日 晩月夜を出したる都の花百零一号来ぬ。永洗の画、藤陰のわが身の上をことごとしくしるせる文あり。

二十三日 神原家の使の女母君を見ておどろく。こは長とかいふ大工の妹にて安達千代子が侍女なりしゆゑ、面を識れるなりけり。姉君来ます。夜半井ぬし突然来て、こさ(52ウ) ふう風を贈り給ふ。文章粗にして華麗と幽棲とを欠く。文につとむることなく、趣向をのみ尊ひ給ふ。人の為には半文の価あらずとも、我が為には友なり。

二十六日 萩の舎の発會にゆく。三宅ぬし文学界一号に星野天知ぬしの文を添えて持ち来給ふ。(53オ)

二十七日 三枝君に返金違約を謝す。

三月二日 図書館にゆく。稲垣といふ産婆に逢ふ。隣家加藤なみ子が友なりとぞ。御伽婢子をよむ。姉君来ます。

三日 姉君金かりに来ます。山田武甫君の送葬昨日なりきといふ。

四日 稽古日なるを休む。(53ウ)

五日 鶯始て鳴く。小説ひとつ松を書き始む。芦澤芳太郎来ぬ。

六日 奥田、久保木来ぬ。

七日 姉君来ます。大工の倅来ぬ。

八日 母君菊地君に招かれ給ふ。

※「八日」は「九日」の誤写と思われる。

十二日 芦澤、藤林房藏来ぬ。

十三日 稲葉の小君、山下直一來ぬ。(54オ\*)

\*左肩に「Ⅲ・」の記載あり。

十四日 灸治す。久保木姉君来ます。

十五日 又灸治す。昨日より一錢だになし。姉君に二十錢借る。廣瀬訴訟の為に上京す。

十六日 廣瀬七重郎帰縣す。廣瀬の話に、野尻ぬし妻を迎へ給ふといふ。國子の心のうちあはれなり。(54ウ)

十八日 机を北窓の下に移す。

二十一日 文学界の平田といふ人來ぬ。高等中学の生徒なるよし。喜一とて、日本橋伊勢町の繪具屋の息子とか。年令二十一といふ。雪の日を三号にまはすといふ。露伴をしたへりといへば、われと同じ心な

り。われも露伴子の本心を知らず、その片は(55オ)しを認めておのが心に引當ててめつるにや知らねど、今の世の作家のうち、幸田ぬしこそいと嬉しき人なれ。弟成友ぬしといふをば平田君同じ高等学校にありて識れりとぞ。女文学者といふもあれど、西洋の口まねのみなるは口をしなどいふ。星野をもおのれをも訪ひ給へといふ。男には交らじ(55ウ)の心なるを、さとも云はれねば、謙遜して辞みつ。少きに哀を知ること深き人なり。

二十五日 誕生日なれば、姉君を招く。

二十八日 西村おつねどの来ます。

二十九日 伊東夏子ぬし来ます。共に西洋の歌を譯し試みつ。

三十日 母君の著作を促し給ふは、金なき(56オ)ゆゑとかなし。

四月一日 上野君清次君ともに来ます。読売新聞をとり始む。

二日 芦沢来ぬ。

三日 母君安達にゆき給ふ。久保木来ぬ。夜伊勢屋のもとにはしる。

五日 萩野を訪ふ。松浦道子の艶聞あり。(56ウ) 秀太郎来ぬ。

※萩野は、萩野の誤写と思われる。

六日 星野の状作を求む。

八日 山下直一君来ぬ。

九日 三枝君、姉君、芦沢などの客ありき。

十日 久保木、菊池の二家へ、母君風邪の見まひにゆき給ふ。久保木にては長十郎(57オ\*)ぬし病めり。

\*左肩に「Ⅳ・」の記載あり。

十二日 小石川に物す。

十四日 図書館にゆく。

十五日 藤本君がりゆく。稲葉君就職に入用なる衣類を西村君に借りてもらひたしとて、お鉢どの来ます。

十七日 母君上野東照宮に詣で給ふ。安達(57ウ)君、稲垣長太郎、(大工)奥田老人などの客あり。○我家はもと文部の官吏中嶋といふもの住めりき。盜に逢ひて妻なる人いろ／＼の人を疑ひ、ものとはし



くなりて移り去りぬとぞ。盗は隣の測量技師堀川といふ若夫婦なりし  
こと(58オ)知れて捕はれぬ。

十八日 家の修繕にかゝる。山下次郎君熊谷より来ます。

十九日 昨日関根只誠翁みまかり給ひぬ。

香奠おくらんとて、邦子西村に一円借りに行く。芦沢来ぬ。

二十日 奥田老人来ぬ。廣瀬裁判事件(58ウ)にて上京し、直ちに帰  
縣す。

二十二日 小石川に物す。龍子ぬし懐妊し給ふと聞く。

二十三日 稲葉お鮎君来ます。

二十四日 甲府伊庭の書状来ぬ。電。

二十五日 雷。

二十六日 母君安達にゆき給ふ。姉君来ぬ。(59オ)

二十七日 平田禿木に書を送る。

二十九日 小石川に物す。伊東君、片山君、山名君居ます。芹沢み雪  
君白井某といふ入門の人を伴ひ給ふ。太田竹君齊藤某の妻となりて西  
片町に住むべしとなり。

三十日 芦澤習志野より帰りぬとて来ぬ。久保木来ぬ。(59ウ)